

タシケントでマラリア

広島県 今田 日出太

聞き手（木村茂久男） 今田さん、今日は体験をお聞
きします。よろしく願います。

今田 私たちは鉄砲持った部隊じゃないんで、ソビエ
ト侵入と同時に南へ下がれということで、飛行場を全部
焼いて、装備を全部貨車へ積んで、その装備の上へみん
な座り込んで、奉天までやってきましたが、奉天へ入る
前に終戦になりました。それで、奉天へ入って、今度は
すぐに山の中へ一応逃げたという格好で、そうこうして
いるうちに、奉天にソ連軍が侵入してきて、その指揮下
に入れということで、奉天の関東学院というたですか
な、どこかへ集合させられて、武装解除させられまし
た。

聞き手 そこで無条件降服ですね。

今田 そうです。

聞き手 すると、そこから、今度はどこかへ集結した
ということでしょう。

今田 奉天で武装解除されて、そのまま部隊ごとの集
まりで編成されたんですが、そこらのところが、私
らもどういふふうに編成されたのかわかりませんけれど
も。

聞き手 それから、今度は。

今田 奉天から、今度は貨車へ乗せられて、一路北上
して行ったわけです。

聞き手 何日ぐらいかかりました、ハバロフスクま
で。

今田 奉天から黒河までですな。奉天を出たのが九月
十六日と私は記憶しておるんですが、一日や二日のズレ
はわかりません。十月十六日に黒河へ着いたようになって
おります。約一か月。汽車は、それこそとまっておる
間の方が長いというような調子でした。その当時は、ま
だ軍隊の糧秣、被服、一切積んでおるんですから、その
当時の食べることは、まだそう逼迫してはいなかったん
です。それでも、もう軍隊が済んだということで、糧秣

を盗みにいきおったこともあります。上官も見えて見ぬふりしているような状態です。

それから、今度は黒竜江を渡ってブラゴエチェンスクへ着いたんですが、そこで四、五日の間はおったです。その野営がまた大変なんですな。その装具を枕にして寝ると、ガサガサと枕がないようになるんです。そうすると、どうしたのかなと思うと、それこそ今言う若いもん、子供が来て、その装具を抱えて逃げおる。追っていくと、あの歩哨がバンバンと撃つわけなんです。逃げられんです、動かれんです。走ったら、もうそれこそ一発やられますから、何か取られ損というような格好ですな。

聞き手 そうですか、それから今度は。

今田 そこで、いかに向こうの物が逼迫しておったかということを感じましたな。本当にこんなにまで物がなにかということ、第一発目ですな。それから、ブラゴエチェンスクから汽車に乗って、北上したわけです。

聞き手 それから、ラーゲルまでいえば、どこらなん

です。

今田 私のところはタシンケント地区といまして、中部アジアです。これから、十月二十六日にブラゴエチェンスクを出発して、収容所へ着いたのが十一月の二十日過ぎだったと思います。これも汽車に乗って二十五日ぐらい。

聞き手 じゃあ、わりかた近かったんじゃないね。

今田 それでも、中部アジアのかなり奥深いんですから、もうそれこそ山を越えればインドですか、天山山脈の流れですから。それも貨車に乗って、一番最初に駅へ着くと、中から戸をあけるのに、外からあけてくれるんです。あけてくれるのはいいんですが、端っこにある荷物をまた取って逃げられる。

聞き手 そういうことはいろいろ、みんな各輸送部隊ともあったらしいですね。

今田 それが、前にどんだん貨車が行っておるもんですから、みんなやつこさんも上手になってきとるんでしょうな。

聞き手 それから、そこに着かれて、ラーゲル入られ

てからは、どういう作業されたんですか。

今田 ラーゲルに入って、人がいなかった、整備されてないところへ入ったんですから、ここで一週間ぐらいは環境整備をやりましたな。

その一週間後に、今度はチルチック市というところに機械工場があったんです。私たちは機械工場へ入ったもので、わりと仕事は、どう言うか、土方、地球削りと言います。いよりましたか、それから建築現場、伐採、これらに比べればわりといい方じゃなかったかと思うんです。気候もそう、この緯度が北海道ぐらゐの緯度ですから。

聞き手 それじゃあ、わりかた寒くなかったですか。

今田 そうですな。そのかわり今言う、ぐるりに高い山がありますから、この山が白い間の方が長いんですな。「おお、ようやく雪が消えたな」と思っていると、次はもう白くなってくる。川の水も冷たいんです。

聞き手 それで、そこで何年ぐらゐラーゲルにいられましたか。

今田 そこで、三年おりました。

聞き手 それじゃあ長い方ですな。

今田 そこで、三年、本当に苦勞しました。この間が一番つらかったでしょう。食べる物、それから着る物は、もちろん、本当に内地におる人には想像できんくらい。

聞き手 パンはやっぱり三百グラムですか。

今田 そうです。パンを前の晩、一日分をくれるから。

聞き手 前の晩に。

今田 前の晩に。そうしないと、小そう、小そう分けたら、分けるのに手間が要るから、晩にパンをくれるわけです、あしたの朝からの一日分を。それを晩の間にみんな食べてしまします。その明くる日は、それじゃからスूप。

聞き手 なるほど。それじゃあ、あなた方の作業というのは、わりかたノルマ的には、そうやいやい言われなかったということですか。

今田 そうですな、工場の中に入っている者は、ノルマは十分に達しておりました。

聞き手 そうでしょうね。

今田 そうそう。ドイツの捕虜が笑うとったですがな、「日本人は何であれぐらいよう働くんじやろうか。」

聞き手 ドイツ人もおったんですか。

今田 はい、ドイツ人もおった。「だれのために働いておるんじやろうか」言うて。あの点、ドイツの捕虜なんかは、悠長な暮らしをしておりましたですな。日本はどうしても、今言う、ソ連は仕事をしない者は食べるべからずという何がありますから、ハラシヨールボータは、テーブルの真ん中へ白いクロスをかけて、そこで大きなパンをごちそうしてやり、ということを盛んに言いおりましたが、そういうことも二、三したことがあります。が、私らの作業班の大隊長が盛んにそれに抵抗して、日本人はそういうことはしやせん。家族でもそうじやろう、お父さんがよう働きおのけ、お父さんだけようけ食べて、子供はひもじい思いさせるかというようなことを盛んに収容所の方と折衝しよったですが、これもしばらく、ちょっとあっただけで、その後は。

聞き手 そうですか。それで一つのラーゲルへ何人行かれたんですか。

今田 あそこが、千人ぐらいです。

聞き手 それで元気で帰られたのは何人ぐらいですか。

今田 それじゃから、そうバタバタ死ぬというほどのことはないます。一番しんどかったのは風土病のマラリアにかかるとですな。まず第一番に水が悪いですから、水を飲んだらてきめんに腹痛ですな。下痢です。下痢しちよるから休ませというのは通らんで、熱がなけりや休ませてくれん。

聞き手 大体はそうですね、熱がなかったら。

今田 熱がなけりや。マラリアも、朝からマラリアが出てくれりやええんですが、仕事に行つて、工場の途中で、仕事をしおるとブルブル震え出すわけです。何でもんなに熱があるのに仕事に出てきたんかと言つて、向こうの工場の者は言うけど、それはしょうがないんで、それでマラリアの薬をもらうんですが、マラリアの薬をもらうと、あれはきついキニーネですか、きついやつをもらうと、熱は出るようになるけど、そのかわり今度は下痢をし出すんです。

私なんか、そのキニーネは飲まずにしていて、下痢は消し炭で止めて、消し炭を飲みおったです。あれが一番よう効くんですよ。消し炭が水分を吸収するんで、下痢をしないということなんです。これは理屈に合うておるじゃろうと思うんですが、真っ黒い便をしてね。みんなそれぞれにそういう知恵を絞り合うて、消し炭を飲んで下痢を止めて、仕事に行きおりました。

聞き手 それじゃあ、何ですか、三年もおられたら、帰られたのは二十四年ですか。

今田 二十三年の五月にタシケントを出発して、ナホトカへ着いたんです。

聞き手 その間、三年間の間に、思想教育なんかはやりましたか。

今田 それが一番ガンでしたな。思想教育、みんな、なりとうもないアカにならにゃあいけんいうこと、これが一番何でしたな。しかし、ならずにおると、一人だけ外れもので、運が悪ければ、それこそ牢屋へという格好で、しょうことなしに、みんなそれについていきました。

聞き手 大分苦勞されましたね。それから収容所から今度は帰るといふときに、いろんな情報が入ったでしょう。あすは帰す、来年は帰すとか。

今田 そうですね。もうこれでおまえたちは日本へ帰れるんだからというんで、タシケントを出発して、帰りもやっぱり二十日から上、汽車に乗って帰りました。ナホトカへ着いてみて、ナホトカへ着くなり「おーい、船はどこなら」言うて、一貨車の者が皆出て、海岸の方へ、海の方へ向いてダーと駆けたわけです。そこで、ストップ食ろうたんです。

聞き手 それはいけんわな。

今田 それで、ストップ食ろうて、それでもう一遍、集まれ、バックせい。それでまた貨車の中へ入れられて。

聞き手 それでまた。

今田 いや、もう奥へは行かなかったですが、どうも後で思い出してみると、そういうふうに次々来る貨車は皆レーニン、スターリンのあの肖像画を掲げて、赤旗を振りながら正々堂々と帰ってきおりますわな。インター

ナショナルを歌うて。うちの部隊はそれがないんですから、それまで国定忠治をやりおった収容所ですから。

聞き手 演芸会をね。

今田 演芸会では国定忠治をやつては、つるし上げ食らいおったんですから、まあ、これが一番日本人にはよく合っております。

聞き手 そうですね。

今田 二十三年の五月に出てきて、二十三年の六月の半ばにナホトカへ着いて、ナホトカでまた一年。

聞き手 そうですか。一年もおちちゃったんですか。

今田 丸一年ちょっとおりました。ナホトカで自分らの入る家建てて、それまでは貨車で。

聞き手 それじゃあ、ナホトカでは何をされておったんですか。

今田 たちまち、自分らの住むところを建てにやいけんですから。大体、ロシアにも人間がないんですな。

おると言えば女と年寄りと子供ですな。家を建てる大工の技師が女技師でした。そして家を建てるんでも、日本なら大工さんがよろけおりましたけ、これが指図して、

棟上げまで、何日たつても、柱一本建てるのです、日本の大工は。それをやると「どうして日本人は柱を建てんのか」と言うて、怒ってくるんです。「まあ、任せておけ、任せておけ」と言いおったですが、しばらくして一日で棟まで上げたら「オー、ハラショー、ハラショー」と言うて、喜んで、それから、ものを指図せんようになります。

聞き手 もう日本人独自に皆任せちゃった。

今田 そうです。そういうふうな、向こうには技術者が全然いなかったんでしような。それで、その家を建てて、ちょうど夏だったからよかったんです。野宿するにしても。そうこうしているうちに家ができて、また寒うなつて、そこで再教育です。

聞き手 また、そうですか。

今田 この間は、仕事もしましたけれども、本当に教育が主だったです。

聞き手 そうですか、それは大変ご苦勞でした。ぼつぼつ時間が来ちゃったから、このぐらいいひとつ。どうも大変ありがとうございました。